

夏なつの晩方ばんがたあつた話はなし

小川おがわ未明みめい

「おじさん、こんど、あめ屋や(注)さんになったの。」

正ちゃんまなは、顔かおなじみの紙芝居かみしばい(注)のおじさんが、きょうは、あめのはいった箱はこをかついできたので、目めをまるくしました。

「ほんとうだわ、おじさん、あめ屋やさんになったの。」と、花子はなこさんもききました。

「ええ、あめ屋やになりましたよ。」

「どうして？」

「紙芝居かみしばいがたくさんになって、話はなしでは、はやりませんから、これからあめで、なんでも造つくりますから買かってくださいね。」と、おじさんは、いいました。

そこへ、英ちゃんえい、誠さんまこと、年ちゃんとしたちが集あつまってきました。

「おじさん、さるでも、たぬきでも、なんでも造つくれて。」

英ちゃんえいは、不思議ふしぎそうに、おじさんの顔かおを見みました。

「いつ、おじさんは、けいこをしたんだい。」と、誠さんまことが、ききました。

「おじさんは、もとから、このほうがお話はなしよりもうまいんです。」と、おじさんが、笑わらいました。

正ちゃんまなは、お家うちへ駆かけ出してゆきました。年ちゃんとしも、つづいてゆきました。お母さんかあに、おあし(注)をもらってくるためです。そのうち正ちゃんまなは、にこにこしながら、もどってきました。

「なにをこしらえてもらうかな。」と、正ちゃんまなが頭あたまをかしげまし

た。

「正ちゃん、うさぎがいいだろう。」と、誠さんがいいました。

「うさぎなんか、つまらない。それよりか、象がいいな。」

「ああ、象がいいわ。」と、花子さんが、いいました。

正ちゃんは、動物園で見た象のことを思い出して、それがいいと思
ったから、

「おじさん、象をこしらえておくれよ。」と、おあしを渡しました。

「はい、はい、象をこしらえますかな。」と、いって、おじさんは、
あめを管の先につけて、まるめたり、吹いたりして、やっと一びきの
象がで上がりました。

すると、これを見た、子供たちは、笑い出しました。

「おじさん、これが象なの？」

「象と見えませんか。」

「鼻が足みたいだ。」

「尾が、あんまり大きくて、みっともないよ。」

みんなは、げらげら笑い出しました。おじさんは、きまりが悪くな
って、

「象は、下手ですから、なにか、ほかのものを造ってあげましょう。」
といいました。けれど、子供たちは、もう、信じませんでした。

「おじさんは、やはり、お話がいいよ。」と、年ちゃんがいいまし
た。

「ああ、お話がいいね。」と、みんなが、賛成しました。

夏の白い雲がうごく、空の下の原っぱで、子供たちは、おじさんを
取り巻いて、かわいそうな子供のお話をききました。絵紙(注)はなか
ったけれど、話が上手で、目に見る気がしてみんなは感心してきい
ていました。お話が終わると、おじさんは、あめを分けてくれまし
た。

「おじさん、たぬきや、象ぞうをつくるより、よっぽどお話はなしのほうがおもしろいよ。」

「もう、そんなもの、つくるのおよしよ。」

「じゃ、また明日あしたから、紙芝居かみしばいの道具どうぐを持ってきますかな。」

「僕ぼくたち、ほかの人のひとをきかないから。」

「ありがとうございます。」と、人のひとのよいおじさんは、喜んで、箱はこをかついで、お家うちへ帰かえりました。

どんなに、おじさんは、やさしいみんなの心こころを、ありがたく思おもったでしょう。

注 この作品は未明童話集『小豚の旅』（昭和10年）に収録されました。

紙芝居…物語の流れにそって描いた複数の絵を順番に見せながら説明を加えてゆくこと。

あめ屋…あめで、鳥や動物、魚、草花などの形を作って売る人のこと。

おあし…お金のこと。

絵紙…紙芝居の絵のこと。